

# 八の宮家をめぐる「つれづれ」

——〈喪失〉・〈不在〉の物語として——

高 橋 汐 子

## 1 零された時間

「そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。」で始まる橋姫巻は、その冒頭部が示唆するように、権勢の圏外へと追いやられていた古宮が、突如掘り起こされる形を成す。そしてこの橋姫巻では、長年に渡る八の宮家の零落ぶりを語りつつ、それを表象するかのように「つれづれなる」時間が繰り返されていく。

都とは異なる論理の中で、「手持ち無沙汰な」時間を送らざるを得ない八の宮にとつて、年月はまさに「つれづれ」であることに相違ないのであるが、それは単なる時の流れの表象ではなく、やはり、葛藤、欲望、情念が生み出す〈喪失〉への強い意識と執着の表れなのではないか。

藤田加代「つれづれ考」では、源氏物語における全百十四例の

「つれづれ」の用例のうち、約84%は、苦悩、嫉妬、悲哀、疑惑、焦燥感等を誘発する事象の中で体験する心情の表現であることを示唆している<sup>(1)</sup>。また、小松英雄は『徒然草』冒頭における「つれづれなるままに」について、「することがなくて退屈だから、ではなく、すればすることがあるのに——あるいは、あるはずなのに——、支障ないし事情があつて手がつけられず——あるいは、手がつかず——、空白になつた時間をもてあまして、」と解釈し、「つれづれ」が単なる「退屈」とは異なることを指摘する<sup>(2)</sup>。

「つれづれ」とは、何か最も渴望している対象の（例え無意識下であつても）外に在る自己が、その対象に吸引されつつも介入できないような状態であり、そうして、最も執着している対象へと果たされないエネルギーが、紛らわされ、慰められ、空転していく（時間）の表象であると考えられるが、その用例の多くが死別や恋愛間

におけるトラブルや懊悩を要因としているのに対し、『徒然草』冒頭部や須磨巻における用例は、慨世観に通じる、渦中から零れ落ちたものに流れる異質な時空概念が在るように思う。その一端を零落した宮家の物語である橋姫巻を中心に考察していきたい。

①年ごろ経るに、御子ものしたまはで心もとなかりければ、さうさうしくつれづれなる慰めに、いかでをかしからん児もがなと、宮ぞ時々思しのたまひけるに、めづらしく女君のいとうつくしげなる生まれたまへり。これを限りなくあはれと思ひかしづききこえたまふに、またさしつづきけしきばみたまひて、このたびは男にてもなど思したるに、同じさまにてたひらかにはしたまひながら、いといたくわづらひて亡せたまひぬ。宮、あさましう思しまどふ。(橋姫⑤ 一一八)

長い年月の経過とともに、夫婦仲の睦まじさだけでは満足できなくなった八の宮は、御子の誕生を望むようになる。「心もとなし」には子孫を絶やすことへの不安が隠されており、「このたびは男にてもなど思したるに」とあるように、八の宮の〈家〉に対する思いがけない強い意識を窺い知ることができる。

続く②の場面では、北の方の死に伴う寂しさが語られているが、その前に八の宮を取り囲む風景が描写されており、かつての栄光の

残照の中に、荒れ果てた現況を臨む八の宮の心理の中に「つれづれ」が垣間見られる。

②さすがに広くおもしろき宮の、池、山などのけしきばかり昔に変わらでいといたう荒れまさるを、つれづれとながめたまふ。家司などもむねむねしき人もなかりければ、とり繕ふ人もなきまに、草青やかに茂り、軒のしのぶぞ所得顔に青みわたれる。をりをりにつけたる花紅葉の色をも香をも、同じ心に見は、やしたまひしにこそ慰むことも多かりけれ、いとどしくさびしく、よりつかん方なきままに、持仏の御飾りばかりをわざとせさせたまひて、明け暮れ行ひたまふ。(橋姫⑤ 一一〇・一一二)

「つれづれ」が、本来「それをもとめようとしてもとめえない、精神上的飢渴感」であるように、この場面におけるその対象、つまり在るべきものの不在とは亡き北の方でありつつも、その深層にかつての失われた栄光があることは言うまでもない。「家司などむねむねしき人もなかりければ」、「よりつかん方なきままに」と宮家であるならば、宮であるならば、と本来在るべきものの、在るべき姿が繰り返し提示されつつ、その不在(喪失)は露呈されていく。その何とは知れぬもの寂しさを紛らわすようにして、八の宮は仏道修行へと勤しむのである。

姫君達の心境の中にもまた「つれづれ」が語られる。

③容貌いときよげにおはします宮なり、(略) 君たちをかしづきたまふ御心ばへに、直衣の萎えはめるを着たまひて、しどけなき御さまいと恥づかしげなり。

姫君、御硯をやをら引き寄せて、手習のやうに書きませたまふを、(略)

よからねど、そのをりはいとあはれなりけり。手は、生ひ先見えて、またよくもつづけたまはぬほどなり。「若君も書きたまへ」とあれば、いますこし幼げに、久しく書き出でたまへり。

(略)

御衣なども萎えはみて、御前にまた人もなく、いとさびしくつれづれなるに、さまざまいとらうたげにてものしたまふあはれに心苦しう、いかが思さざらん、絳を片手に持たまうて、かつ読みつつ唱歌もしたまふ。姫君に琵琶、若君に箏の御琴を。また幼けれど、常に合はせつつ習ひたまへば、聞きにくくもあらで、いとをかしく聞こゆ。(橋姫⑤ 一二三・一二四)

繰り返される「萎えはめる」「御衣も」「御前」の人気の無さも、姫宮たちの在るべき姿とはほど遠い。その前後に描かれる書と楽を巡る姉妹の美質も、元来の筋の良さとそれを磨くに足らない現況、発揮する機会すら与えられていない状況が実に不釣り合いでもどかしい。そのような心境の中に「つれづれなる」意識が浮上してくるの

である。続く④の場面においては、八の宮の境遇が描かれているが、やはりそれも豊富な財宝とそれを管理し得ない無頓着さ、宮の器量を持ちながらも、それに見合わない孤立した姿が不安定に軸を狂わせ、「つれづれ」を生んでいる。

④文帝にも女御にも、とく後れきこえたまひて、はかばかしき御後見のとりたてたるおはせざりければ、才など深くもえ習ひたまはず、まいて、世の中に住みつく御心おきてはいかでかは知りたまはむ、高き人と聞こゆる中にも、あさましうあてにおほどかなる、女のやうにおはすれば、古き世の御宝物、祖父大臣の御処分、何やかやと尽きすまじまりけれど、行く方もなくはかなく失せはてて、御調度などばかりなん、わざとうるはしくて多かりける。参りとぶらひきこえ、心寄せたてまつる人もなし、つれづれなるままに、雅楽寮の物の師どもなどやうのすぐれたるを召し寄せつつ、はかなき遊びに心を入れて生ひ出でたまへれば、その方はいとをかしようすぐれたまへり。

(橋姫⑤ 一二四・一二五)

⑤秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は網代の波もこのごろはいと耳かしがましく静かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日のほど行ひたまふ。姫君たちは、いと心細くつれづれなまざりてながめたまひけ

るころ、中将の君、久しく参らぬかと思ひ出で、きこえたまひけるままに、「有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなく、やつれておはしけり。

(橋姫⑤ 一三五・一三六)

⑤の場面は八の宮不在の山荘を薫が訪れる場面である。「いと心細くつれづれまさりて」の表現の中に、山里暮らしを送る姫君たちにとつて、「つれづれ」はもはや日常化したものであることが知られる。父八の宮の不在によつて助長された「つれづれ」なる風穴に忍び込むかのように、身をやつした薫のかいま見が開きされていくのである。

前述したように、源氏物語における「つれづれ」は、主として親しい者の死や恋慕といった、個人的な感情の抑揚の中に、それらを請い求めようとする懊悩として描かれるものであった。だが、この橋姫巻以降八の宮家を巡る物語において頻出する「つれづれ」は必ずしもその対象を明確(対個人)にしてはおらず、終始其処に漂うものがある。しかし、裏を返せば、それは自己(あるいは宮家)そのものに既に(喪失)が内在しているということであり、都時間を離れたが故に生じた必然的な「つれづれなる」時間の流れと、(喪失)へと駆り立てられる欲望、あるいは情念が意識的にも、また無自覚にも慢性化して底流しているのである。

自己が規定する本来在るべき姿、あるいはかつての残照を請うようにして、以降も「つれづれなる」時間と、「つれづれなる」思いが交錯していく。

## 2 隔てられた時空

⑥例の、かう世離れたる所は、水の音ももてはやして物の音澄みまざる心地して、かの聖の宮にも、たださし渡るほどなれば、追風に吹き来る響きを聞きたまふに昔のこと思し出でられて、「笛のいとをかしうも吹きとほしたなるかな。誰ならん。昔の六条院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか。これは澄みのぼりて、ことごとしき氣のそひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など独りごちおはす。「あはれに久しくなりにけりや。かやうの遊びなどもせで、あるにもあらで過ぐし来にける年月の、さすがに多く数へらるることかひなけれ」などのたまふついでにも、姫君たちの御ありさまあたらしく、かかる山ふところひきこめては、やまずもかなと思しつづける。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひよるまじかめり、まいて今様の心浅からむ人をばいかでかは、など思し乱れ、つれづれとながめたまふ所は、春の夜もいと明かしがたきを、心

やりたまへる旅寝の宿は、酔ひの紛れにいとどう明けぬる心地して、飽かず帰らむことを宮は思す。

(権本⑤ 一七二・一七三)

追い風に乗せられるようにして、川向こうの楽の音に八の宮の追憶が始まっていく。句宮や「六条院」が醸し出す都世界の風雅は八の宮には遠い過去の〈記憶〉である。微かに聞こえる笛の音の中に、かつての〈記憶〉が蘇る。そして、「かかる山ふところにひきこめてはやまずもがな」という思いは姫君たちを通していよいよ意識化され、八の宮を駆り立てる。

過去と現在を、栄華と落魄を分かつかのような一筋の流れ(宇治川)が決して越境し得ぬものとして横たわり、其処には二つの世界が広がっている。いつまでも飽くことのない旅寝の夜が春の宴の酔いに紛れて「いとどうに明けぬる」時間の中、同じ春の夜を、今宵は一層「いと明かしがたき」長い夜として苦悶する八の宮邸は「つれづれとながめたまふ所」として位置づけられている。

⑦ **いつとなく心細き御ありさまに、春のつれづれは、いとど暮ら**

しがたくながめたまふ。ねびまさりたまふ御さま容貌ともいよいよまさり、あらまほしくをかしきも、なかなか心苦しう、かたほにもおはせましかばあたらしく惜しき方の思ひはうすくやあらまじなど明け喜れ思し乱る。姉君二十五、中の君二十三

にぞなりたまひける。

(権本⑤ 一七六・一七七)

「いつとなく」日常化した心細さに、春ののどかな時間は一層長く暮らしがたい。そのような八の宮の「ながめ」の中に成熟した姫君たちの姿がより輝いて映る。だが、その「あらまほしくをかしき」姫君の容貌こそが、また八の宮を「心苦し」く「つれづれ」へと追い詰めていくのである。それは、姫君たちの「容貌」が落魄した境遇に相応しからぬ、姫宮の品格を未だ審してはいないからである。

### 3 八の宮の不在

——〈記憶〉の中の「つれづれなる」時間感覚——

八の宮の死後、八の宮家を覆う「つれづれ」の時間は父の不在によつて一層深刻なものとなり、姫君たちを覆っている。

⑧ 花盛りのころ、宮、かざしを思し出でて、そのをり見聞きたまひし君たちなども、「いとゆゑあらし親王の御住まひを、また見ずなりにしこと」など、おほかたのあはれを口々聞こゆるに、いとゆかしう思されけり。

つてに見し宿の桜をこの春はかすみへだてず折りてかざさむ

と、心をやりのたまへりけり。あるまじきことかなと見たま

ひながら、いとつれづれなるほどに、見どころある御文の、うはべばかりをもて消たじとて、

いづくとかたづねて折らむ墨染にかすみこめたる宿の桜を

なほかくさし放ち、つれなき御気色のみ見ゆれば、まことに心憂しと思しわたる。

(稚本⑤ 一一四)

しかし、句宮の「見どころある御文」に心ならずも中の君の「つれづれ」が刺激されているこの場面を最後に、八の宮家に繰り返された「つれづれ」は消えていく。

そして以降、それは中の君の回想の中に度々表れ、(宇治)での時間を規定していく詞へと変化していくのである。

⑨行きかふ時々に従ひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言いかはし、心細き世のうさもつらさもうち語らひあはせきこえしにこそ、慰む方もありしか。

(早蕨⑤ 三四五)

⑩風のさと吹き入るるに、花の香も客人の御匂ひも、橘ならねど昔思ひ出でらるるつまなり。つれづれの紛らはしにも、世のうき慰めにも、心とどめてもてあそびたまひしものを、など心にあまりたまへば、

(早蕨⑤ 三五六・三五七)

⑪幼きほどより、心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひと

どめたるさまにもおはせざりし人—ところを頼みきこえさせ、さる山里に年経しかど、いつとなくつれづれにすこくありながら、いとかく心にしみて世をうきものとも思はざりしに、うちつづきあさましき御事どもを思ひしほどは…

(宿木⑤ 四〇三)

⑨⑩は大君亡き後、その往時を偲ぶものである。これは共に資料②の場面、「さすがに広くおもしろき宮の、池、山などのけしきばかり昔に変わらでいといたう荒れまさるを、つれづれとながたまふ(略)をりをりにつけたる花紅葉の色をも香をも、同じ心に見はやしたまひしにこそ慰むことも多かりけれ、」へと回歸するものと言えよう。また、それらの(記憶)を総括するようにして、⑩は京へと移転した後、宇治でのこれまでの自己の境遇を省みたものである。大君の人生にも、また中の君の人生にも、山里での零落した暮らしぶりが「つれづれ」として位置づけられている。そしてその「つれづれ」とは「いつとなくつれづれにすこくありながら」が示唆するように、限られた対象への欠如や欠落、不在といった変化の中に存在するのではなく、八の宮家を覆う(時間)の中に必然的に内在していることが改めて確認されるものとなっている。

政界からとり零された時間の中に生きるひとりの「古宮」が、再びその中枢へと惹き寄せられる無自覚の欲求の中に、あるいはかつ

ての栄光の残像を臆気に追うその残照の中に、八の宮家の「つれづれ」は執拗に描かれ、繰り返され、姫宮たちにもその欲望は潜在的に引き継がれてきた。

しかし、その後、いざ「世」の中枢へと放り込まれた姫宮は何を思ったか。中の君の回想に表れる最後の「つれづれ」(⑩⑪)には、もはや苦渋の色はない。「つれづれ」の日々でさえ、失われた過去としての懐かしさにくるまれているのだ。そして、そこにはその「最中」、「渦中」を生き抜かねばならない新たな悩みこそが、本当の苦渋として女宮の前に横たわっているのである。

中の宮が都へと移り、匂宮の妻となり、子を孕むことで、八の宮の欲望がある種の成就を遂げたとき、皮肉にも当の中の宮はかつての山里暮らし(「つれづれ」)を貴重な時間、あるいは輝かしい時として懐かしんでいる。そこには、栄耀栄華から零れ落ちた者の王権奪還の物語という正編の枠組みを超えた、新たな苦悩と規定が生まれている。空洞化した「幸ひ人」の呼称が提示するように、必ずしも自己と他者の欲望、認識も合致し得ない。

八の宮家を覆う苦渋の時間であったはずの「つれづれなる」日々は、幸福の象徴として、あるいは離散した「八の宮家」を再び結び共有の時間感覚として、安穩とした(記憶)へと差し替えられ、未来を生きる中の君の支えへと変貌を遂げているのである。

\*本文は小学館『新日本古典文学全集』に拠る。

(1) 藤田加代「つれづれ考」(『高知女子大国文』一九六九) 参照。

(2) 小松英雄「徒然草抜書：表現解析の方法」(『講談社学術文庫 一九九〇』参照)。

また、『徒然草』冒頭の解釈を巡っては、『寿命院抄』以来の説を引く(所在なき、退屈、無聊等を根幹とする)ものと、『文段抄』系統を引く(兼好の清澄な心境、寂寥から来る孤独の快味を見出そうとする)説とに、大別される。島津久基「つれづれなるまま」(『国語と国文学』一九二六、七七八)は「つれづれを「静観と内察の自由を許された時間であり、モノノアハレを感じさせる時」と説き、また、小林秀雄「無常といふこと―徒然草―」(創元社 一九四六)は、「まぎるる方なく、唯独りある幸福並びに不幸をいふのである」とする。それらの論を受け、菅原真静「つれづれ草」における『つれづれ』の境地」(『日本文学』一九七二、七)は、「つれづれとは、『しなくてはならない』というよつなことのない。そして不安もあせりもない『無』の環境である」と意味付けている。一方で、井出恒雄「つれづれ」の意味」(『文芸と思想』一九六五、三)は、「つれづれが「理想的な境地」であるとする説を批判し、井出論を受けつつ、下房俊一「『つれづれ』考―『徒然草』序文の解釈をめぐって」(『国語国文』一九七七、十二)は、「つれづれを「ある人なり物なり、またそれは具体的に意識にのぼる対象である必要はないのであるが、それをもとめようとしてもとめえない、精神上的の飢渴感である」とし、示唆される点が大きい。

(3) (注一) 藤田論文では、源氏物語における「つれづれ」の用例を、主に「愛情問題に関するトラブル」(37%)、「親しい者の死に関して体験するつれづれ」(14%)、「逆境の人間が味わうつれづれ

(18%強)、その他(8%)に区分する。「つれづれ」の語意の解釈、源氏物語における用例については、高橋「つれづれ」の女君—浮舟物語における『つれづれ』考(『物語研究』第四号 二〇〇四・三)において考察した。

(4) 須磨巻でもまた同様に「つれづれ」が繰り返されており、そこには都へと吸引される光源氏の姿が明確に読みとれる。

(例)『須磨』は「年かへりて日長くつれづれなるに」植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふをり多かり。二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく、南殿の桜は盛りになるらん、一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦したまひしも、思ひ出できこえたまふ。

いつとなく大宮人の恋しきに桜かざしし今日も来にけり

いとつれづれなるに」大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、ものをりごとくに恋しくおぼえたまへば……須磨② 二二・二二三)

(5) 下房俊一『つれづれ』考—『徒然草』序文の解釈をめぐって—

(『國語國文』一九七七・十一)

(6) 原岡文子「幸ひ人中の君」(『源氏物語 両義の糸』有精堂 一九九一)は中の君の結婚を表象することばとして「幸ひ人」に着目し、他者の視線と内実との剥離、「幸福で不幸な」表裏性を軸に、中の君物語を鮮やかに読み解く。石坂晶子『思ふ』女の未来学(『源氏物語における思惟と身体』翰林書房 二〇〇四・三)は中の君自身の意味に反して、語り手によって「幸ひ人」と位置付けされてい

く矛盾点を指摘する。また、周囲の女房に焦点を当てた、磯部一美「『源氏物語』宇治中の君物語の周縁—(幸ひ)を支える女房たち—」(『人物で読む『源氏物語』第十九巻—大君・中の君』勉誠出版 二〇〇六・十一)などがある。

(本学大学院博士後期課程修了)